

王女はそれを聞いて、「では、きっと、お父さまの兵隊が、あなたがたを殺しにまいりましたのでしょう。ああ、いいことがございます。ちょっと、お待ち下さい。」と、息を切らしながらこう言って、王子たちに手を離してもらいました。そのうちに兵は、「うわあっ。」と、とき声を上げて、王子たちの後ろまで追いついて来ました。王女は王子にケガがあってはたいへんだと思って、おお急ぎで、かぶっている顔かけを引きはなしました。そのときちょうど、風は兵隊の方へ向いてふいていました。王女はその顔かけをいそいで後ろへ投げつけて、「さあ、はえておくれ。この顔かけの糸の数ほどはえておくれ。」と、おまじないの言葉をとなえました。すると、たちまちみんなの後ろに、大きな木が、一どにギッシリはえのびて、またたく間に大きな大深林ができました。兵隊たちは「おやっ。」と言ってまごまごしながら、その木の間をむりやりにくぐりぬけようと、もがきました。王子と三人の家来とは、そのまに、王女をつれて一生けん命に、にげのびました。みんなはしばらく、かけ続けにかけた後、やっと安心してひと休みしました。王子は、そ